

Title	The Adventures of Augie March : ポストモダンの局面との関係をめぐって
Author(s)	片渕, 悦久
Citation	Osaka Literary Review. 32 P.52-P.63
Issue Date	1993-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25477
DOI	10.18910/25477
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

The Adventures of Augie March: ポストモダンの局面との関係をめぐって

片 渕 悦 久

I

Saul Bellow の *The Adventures of Augie March* (1953) は、主人公の Augie March が自分の人生を語る物語である。しかし、彼の語りからはまとまりのある物語世界が浮かび上がってこない。ここから以下の推測ができる。つまり語られる体験は、Jean-François Lyotard の言う、統合性や一貫性を持つ物語の消滅の結果出現する、「小さな物語」の集まりではないかということである。¹⁾ *Augie March* においては、このような物語群が断片的で、統合性を持たないという点で、いわばポストモダンの小説世界を作っているのではないかという推測が成り立つ。

もちろん *Augie March* の物語世界のまとまりのなさは従来も指摘された。語り手の提示する小説世界の統合性のなさは、Robert F. Kiernan の言葉を借りると、“loose in form, and extravagant in language” という特質を備えていることを示す。²⁾ 従来は、そのような側面がこの小説自体の本質に関わる重要な、意味のあるものではなく、一貫性のない体験を語りながらも、Augie は明確な目標あるいは人生の方向性を持ち続けると考えられた。³⁾ しかし、まとまりのない “loose” さこそが、この小説の本質的な特徴であり、前述のポストモダンの読みによって、それがより際立つと言える。本稿では、これまで言及はされたが、本格的考察の対象とならなかった *Augie March* のこのような側面に焦点を当て、この小説が提示する世界の特質について考察していきたいと思う。

II

Augie March は、主人公と彼の前に現れる、強烈な個性をもつ人物たち (Machiavellians) との関係性を軸に展開する。彼らは現実に積極的に働きかけ、現実を彼らなりの方法で処理しようと企む “destiny molders”⁴⁾ である。彼らは現実に対する独自の体系だった理解の仕方として “versions of what’s real” (402) を身につけている。マキアヴェリアンは *Augie* に対して、彼ら自身の現実把握の仕方を押し付けようとする。そのような行為を指して、*Augie* は彼らのことを “imposers-upon” (524) と考える。彼らは巧みな現実とのやり取りの中に *Augie* を巻き込んでいく。⁵⁾ このような抽象的定義づけでは、具体的に誰が *Augie* の言うマキアヴェリアンであるかの特定は難しいが、本稿では、前述のような関係において *Augie* と対峙する人物を例にあげて考察を進めていくことにする。

Augie の前に現れる最初のマキアヴェリアン Grandma Lausch である。彼女の特質として、彼は “her best inspirations of strategy” (7) を挙げる。この特質は、例えば彼女が少年時代の *Augie* に母親の眼鏡を無料診療所で手に入れさせる計画を立てるという出来事で発揮される。彼女の準備周到さは、*Augie* の次の述懐の中に表現されている。“So Grandma, who had it all ready before we left the house and must have put in hours plotting it out in thought and phrase, lying small in her chilly small room under the featherbed, gave it to me at breakfast” (4). Grandma は、*Augie* 自身も “I was always instructed by the old woman and had to sit and listen with profound care” (8) と認めるように、自分の計画通りに *Augie* が動くことを求める。しかし、これ程までに影響力の強かった Grandma との関係も長くは続かず、彼女の姿は小説の中心部から退く。Grandma Lausch の場合に明らかなように、*Augie* はマキアヴェリアンの影響力を受けるが、それは一時的である。この点に、*Augie* と彼らの基本的関係が見える。要するに、ある人物が消えると別の人物が現れる

が、これはその後も繰り返される。

さて、思春期に達した Augie の前に現れる次のマキアヴェリアンは、不動産を手がける実業家の William Einhorn である。彼は、Augie により、“a brain and many enterprises, real directing power, philosophical capacity” (60) を持つと表現されている。Einhorn のマキアヴェリアンぶりは、有能な実業家として現実として現実と折り合いを付ける生き方に反映している。彼のそのような生き方は主として金銭面において顕著であり、公共料金の不正な節約の仕方を明かしたりするなど、Augie に対して自分の見識をひけらかす面がある。Augie は Einhorn を次のように言う。“Einhorn had a teaching turn similar to Grandma Lausch’s, both believing they could show what could be done with the world” (67)。Einhorn もまた、世の中を生き抜く術を心得ており、それを “a teaching turn” という性質によって Augie に押し付けようとする。しかも、Einhorn はそうした現実把握の妙により他者をひきつけ、自分の陣営に取り込むという特質を発揮する。“The things that had to be done for him were such that anybody who worked for him was necessarily intimate with him” (72)。こうして Augie は Einhorn の人生計画の手先となることを求められる。マキアヴェリアンの計画への取り込みをここでも Augie は具体的に経験するが、Einhorn の Augie に対する影響力もまた永続的なものではなく、ある時期を境にして、彼の影響力も極端に弱まる。

その後 Augie には “From here a new course was set” (125) という彼自身の言葉どおり、次のマキアヴェリアンである、Mrs. Renling が近づく。彼女のこれまでのマキアヴェリアンとの類似点は、自分自身に具体的な計画性があり、それに Augie を引き込もうとすることである。彼女の場合、計画はより具体性を帯びている。彼女は Augie に社交界の生活を教えるだけでなく、彼を養子にしようとする。しかも彼女の意志は、Augie の次の説明にあるように強烈である。“... she couldn’t be interrupted or stopped, in her palefire concentration ...she had so much more force than any-

body else around.” (131) しかし、Augie は養子縁組の申し出を拒絶し、Mrs. Renling の元から離れる。その際彼は、“it wasn’t a fate good enough for me, because that was what came out clearly when it became a question of my joining up.” (151) と言う。この一件から、彼が漠然と「自分にとって十分な運命」を追求する姿勢を見せていることが理解できる。このような基本姿勢に照らし合わせて Augie は、“adoption” という具体的な形で Mrs. Renling の計画に加担することが、自分の考える十分な運命とは別物と考え、彼女からの申し出を断わる。Augie の言う “a fate good enough” については後に改めて考察するが、いずれにせよ Mrs. Renling は Augie による養子縁組拒否の出来事を境に、物語から姿を消し、次のマキアヴェリアンが浮上してくる。

四番目のマキアヴェリアンは、Augie の実兄の Simon である。彼は物質的幸福を欲求し、金持ちの娘と結婚し、Augie にもその妹と結婚することを勧める。Augie は兄の姿を次のように形容する。“Not only did Simon make what he had do, but he went the limit. It astonished me how he took his objectives and did exactly what he had projected” (214). 自分の望みを実現し、しかもその成功を Angie にも強引に分け与えようとする点に、Simon のマキアヴェリアンらしさがある。しかし、Augie は今度も敵に屈しない。Augie が Mimi Villars という友人の中絶の世話をしたことが原因となり、Simon との間に誤解が生じ、一時的にはあるが仲違いしてしまうからである。このようにして Augie は Simon の手中から逃れる。そしてマキアヴェリアンとしての Simon はこの一件の後姿を消し、また次の人物が現れる。

Simon と疎遠になっている間、Augie は労働争議に首を突っ込み、その間に以前に面識のあった Thea Fenchel という女性に再会する。Thea は Augie を同類と認め、積極的に彼を評価する人物である。彼女は、Augie に “you and I are the kind of people other people are always trying to fit into their schemes” (384)、と言うようにマキアヴェリアンらしく

ない。同類の二人だからこそ協調して生きるべきだというのが Thea の論理である。幾度となくマキアヴェリアンの“schemes”に取り込まれかけた Augie は、Thea が求める“something better than what people call reality” (316) に共感し、ついには二人してメキシコへと出かける。Thea によると、彼女の言わば“something better”は、具体的にメキシコの山中で Caligula という名の鷲を使った大トカゲ捕獲を記録映像に残すことである。しかし、その鷲がトカゲ捕りに失敗して逆にトカゲに傷つけられたとき、Thea は Caligula をお払い箱にしようとする。このとき Augie は、鷲が彼女の計画達成の手段としてのみ使われていたことに気がつく。そして、彼女とは熱烈な愛情で結ばれているはずの自分もまた鷲と同じように、彼女の計画の一部に組み込まれるのではないかと感じるようになる。つまり Thea には“the idea of an action for which love makes you ready and sets you free” (349) があり、彼女にとっては愛は目的ではなく、何らかの計画を実行するための手段に過ぎないと Augie は悟るのである。この時点で、Thea も Augie にとって、これまでのマキアヴェリアンと何ら変わらない人物となるのである。つまり、Thea にも独自の現実把握があり、それが自分に押し付けられていると感じ取った Augie は彼女の元を去る。

メキシコを離れた後、Augie は次のマキアヴェリアンに遭遇する。彼は Stella という自称女優の卵に出会うが、その彼女の知人が Mintouchian である。彼は理詰めで Augie を教化しようとする。例えば、彼は人間には“secrets” (484) があり、嘘も人間として当然の営為であると言う。しかも彼は愛を姦通であるという理屈を仕立てあげ、Augie に冷水を浴びせる。また、Mintouchian は、“It is better to die what you are than to live a stranger forever.” (485) と説き聴かせ、Augie に現実認識を促す。彼もまた理詰めの実現解釈を押し付けようとする、つまり自分自身の計画の一部に Augie を取り込もうとするマキアヴェリアンの属性を備えている。しかし、Augie は彼の忠告を受け入れず、予定通り結婚し、その直後、第二次大戦下の輸送船に乗り込み戦場へと赴く。この時点で、Mintouchian の

影響力もまた衰える。

次に登場するマキアヴェリアンは、自称科学者の Basteshaw である。輸送船に乗り込む Augie は、魚雷で沈没した船から辛うじて漂流中の救命イカダに逃れ、ここで Basteshaw と出会う。彼は理論家で、物理学から社会学に及ぶ豊富な情報を駆使して、人間存在の意義を説く。彼は、“The stronger society is, the more it expects you to hold yourself in readiness to perform your social duties, the greater your availability, the smaller your significance.” (504) と言い、Augie を辟易させる。そしてついには、救命イカダの行き先をめぐる意見の相違が生じ、諍いが起こり、Augie は縛り上げられる。この過程で Basteshaw のマキアヴェリアン性が露呈する。Augie の表現を借りると、彼は、“that kind of pedantry” (508) を駆使して、漂流していれば、必ず島が見えると言い張る。このように彼には学識豊かな現実把握があり、それに否応なく同意させようとする点でマキアヴェリアン的と言える。Augie は Basteshaw について次のように述懐する。

This scientist Basteshaw! Why, he was cuckoo! Why, we'd both have rotted in that African sea, and the boat would have rotted, and there would have been nothing but death and mad ideas to the last. Or he'd have murdered and eaten me, still calm and utterly reasonable, and gone on steering to his goal. (512)

結局、両者は無事救助された後、離れ離れになる。しかし、Augie にとってこの経験が重大のものであると言えるのは、このまま死ぬか、“mad ideas” を聞かされ続けるかの極限状態をぬけ、この後彼がついにマキアヴェリアンの呪縛を逃れ、“a settled life” (515) を希求するようになるからである。こうして、Augie とマキアヴェリアンの物語、すなわち、前者に対する後者の影響力の増大と衰退の繰り返しの物語、は一応の終わりを迎える。

以上物語の概要と共に、この小説におけるマキアヴェリアンの特質について述べてきたが、ここで注意すべき点は、例としてあげた個々の挿話が重な

らず独立していることである。例えば、Grandma Lausch は一～四章で主に描かれるが、五章から先は Einhorn の話へと移り、彼女は物語中に殆ど姿を見せない。また Einhorn の物語も七章までで一段落し、八・九章は Mrs. Renling 主体の挿話となる。Simon は断続的に描かれるが、マキアヴェリアンとしての彼の物語は十一・二章で語られる。さらにメキシコの冒険へと連なる Thea の挿話は十四～二十章、次の Mintouchian は二十四章で、Basteshaw は二十五章でそれぞれ主要人物として登場するという具合である。

このようにマキアヴェリアンの挿話はひとつとして小説の最後まで継続して語られるものはない。彼らは交代しながら Augie に影響を及ぼしていくが、その影響力は永続的ではない。彼らはいつの間にか Augie の語りの中心から脱落していく。個々の挿話はそれぞれ小さな物語として機能しているが、全体としてみた場合、あたかも別々の物語が寄せ集められたようである。⁶⁾

しかし、小説全体にこういう状況をもたらすのはマキアヴェリアンではなく、Augie 自身ではないか。マキアヴェリアン物語の中に現れては消えていくのは、Augie が誰にも、どのような状況にも“commit”しないからである。⁷⁾つまり、この小説の物語世界は Augie によって意識的に作り出されているとも言える。Augie がコミットしないのは、ある特定の状況が自分としては満足出来ないときである。それはマキアヴェリアンの提示する価値観の対概念 — “a fate good enough” — を Augie が保持していることを意味する。Robert R. Dutton に従えば、Augie の “better fate” の探求は一種の “rationale” である。⁸⁾ この基準に適合しない限り Augie は何物にも最終的にはコミットせず、“No” と宣言するのである。つまり、“a fate good enough” を求めるが故に、いい加減な妥協をしない彼の《求道者的態度》が強調される。Augie はこの点に関して、以下のように言う。“I had never accepted determination and couldn't become what other people wanted to make of me” (117). マキアヴェリアンの計画に加担す

ることに反発していくことによって、Augie は計画に組み込まれることを回避し、その結果、小説全体に一貫性のないポストモダンの状況が意識的に作り出されているのではないか。

このように Augie はマキアヴェリアンから与えられる様々な世界を不十分として、別の世界を求めていくという身振りを繰り返す。しかし、表面的な無指向性の責任を彼自身に求めてよいのか。Augie にとっての十分な運命は、小説中では“the axial lines of life”に到達することによって見えて来ると考えられる。それはここまで論じて来たポストモダンの世界とどのように関わりあっているのか。この点についてもう少し詳細に考察を進めることにする。

III

Augie は“no commitments”という特質によって物語にポストモダンの状況を自ら作り出す。しかしこのような見方は一見不適當に思われるかもしれない。従来の批評においては Augie はマキアヴェリアンとの関係を清算し、“a fate good enough”に到達する、あるいは少なくともそういう方向性を持ち続けると考えられている。⁹⁾したがって、ポストモダンの状態に身を置くことは最終的には“a fate good enough”に達する前段階的なものとみなされた。すなわち、物語の方向としては何か絶対的な理想へと向かうと考えられてきたのである。

しかし、果してそうであろうか。確かに、“a fate good enough”は“axial lines of life”に到達したときにその全容が解明されるのであり、この意味において“axial lines”と不可避的に結びついている。つまり、“axial lines”は言わばポストモダンな状況を超越するような価値観を提示するものである。Augie にとって、“axial lines”はある瞬間突然見えてくるものであるという。メキシコから戻った後、友人 Clem Tambow との会話の中で彼はこの“axial lines of life”について語り始める。

“I have a feeling,” I said, “about the axial lines of life, with respect

to which you must be straight or else your existence is merely clownery hiding tragedy. I have had a feeling since I was a kid about these axial lines which made me what to have my existence on them, and so I have said 'no' like a stubborn fellow to all my persuaders, just on the obstinacy of my memory of these lines, never entirely clear. . . ." (454)

しかし、“axial lines”はいつ現れるのか。Augieは、“When striving stops, there they are as a gift.” (454) という言い方をしている。彼の“striving”が終わるのは、彼を取り巻くマキアヴェリアンとの関わりがなくなるときであると考えられる。したがって、今は関わりあっても、いつの日かマキアヴェリアンの間をさまようことをやめたときに、Augieには“Truth, love, peace, bounty, usefulness, harmony!” (454) という価値が与えられることになるかと予想される。

実際、Basteshawとの一件の後、それまで様々なマキアヴェリアンの間をさまよっていたAugieは、一転して“a settled life”を求めようになる。つまり、“striving”をやめた後の彼のあるべき状態は、落ち着いた生活を送ることにある。この点に関してAugieは、“I aim to get myself a piece of property and settle down on it” (455) と宣言する。結婚して、中西部のどこかに学校を建てたいとAugieは考える。確かに、彼は物語の結末部ではStellaと結ばれ、またMintouchianの紹介で貿易関係の仕事を受託し、一応は落ち着いた生活を送っているように見える。しかし、Augieは仕事でヨーロッパ中を飛び回っており、結婚生活は必ずしもうまくいっておらず、家族と静かに暮らすという理想も実現できていない。ついにAugieは、“Maybe I can't take these very things I want” (514) と認める。物語の結末部でも彼は決して“settled”とは言えず、まだ“striving”を続けている。

Augieは“axial lines”が見えてきたと言うが、実際にはそれを裏づけるものはない。つまり、彼の発言と実際の行動はかみ合っていない。言い換

えれば、“axial lines”は言及こそされるが、決して現出することはない。具体的な形で Augie の理想がかなえられない以上、“axial lines”に手が届いているとは言えない。つまり“axial lines”は物語の進展につれて自然に見えては来ず、むしろ机上の空論として機能する仕組みになっているのである。

結局マキアヴェリアンの世界を超越するような、Augie の求める中軸線は初めから不在（あるいは存在の保証がない）であると考えべきではないか。少なくとも、Augie が拠り所とすべき価値は小説世界の中には存在していない。つまり、世界に統一性を与えるべき中心—Lyotard の言葉を借りれば「大きな物語」—が不在であり、代わりに小さな物語の断片的集積という事態が生じるわけである。こうして、マキアヴェリアンの物語の集積というポストモダンの状況を越える「何か」が存在するという実感がないうまま、それでも Augie は何か絶対的な理想にいつの日か到達しようとする。彼は実感の薄い“a better fate”にコミットする余り、一時的な行為を繰り返してしまうのである。この点に、ポストモダンの側面が感じられないだろうか。この小説は、断片的な様相を全体にわたって露呈するマキアヴェリアンの物語が、Augie と彼らとの関わり方によって現出する作品である。そして、このような状況は、超越的、絶対的価値観によって統合され解決されるものではないことが、主人公が宣言する“axial lines”の不在によって確かめられる。Augie はまとまりのない断片的な物語群を自ら作り出しながら、同時にそれら小さな物語を統合する幻想としての大きな物語をつねに求め続けているのである。Augie March はこのような矛盾をはらんだ形でも《ひとつの物語》として（いかにもポストモダンの）成立しているのである。

IV

Saul Bellow の小説はこれまで保守的傾向の強いものとして認識されて

おり、同時代のポストモダニストの小説と同列に論じられることはほとんどなかった。Bellow 研究に関しては、Malcolm Bradbury がポストモダニズムを視野に入れ Bellow 小説論を展開しているが、最終的には彼も Bellow 小説をポストモダニズムとは異質のものとしている。¹⁰⁾ Bellow がポストモダニストの範疇に入れられることのない主な理由は、ポストモダニズム批評家の側から言えば、Bellow 小説が“faith in some essential humanity”を探求していると感じられるからである。¹¹⁾ これは確かに部分的には正しい判断であるように思える。しかし、Bellow 研究の最近の傾向としては、単純に Bellow をリアリズムの流れを継ぐ作家のカテゴリーに限定することへの批判がある。¹²⁾ 本稿もこのような最近の批評動向を踏まえ、狭義の保守的とは断定しきれない Bellow の側面を、ポストモダ的な発想に対する視座が明確と考えられる *Augie March* の特質を考察することによって浮かび上がらせようと試みた。Bellow をリアリズムの伝統の中に組み入れて論じる研究も大切だが、同時に、その保守性にもみ焦点を当てて Bellow 小説を類型化するのではなく、別の視点からその可能性を追求することも同じくらい必要なことではないだろうか。Saul Bellow は（たとえ同一ではないとしても）ポストモダニズムを十分に意識した、保守的というカテゴリーではくくることのできない、したたかな作家である。そういう意味で *Augie March* は、Bellow のポストモダニズムに対する姿勢を示す好例であると言える。

NOTES

- 1) ポストモダニズムの確定的な位置づけは未だなされていない。しかし、Jean-François Lyotard, *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*, trans. Geoff Bennington and Brian Massumi (Minneapolis: U of Minnesota P, 1984) は、ポストモダンの側面を簡潔明瞭に指摘していると思われるので本稿において参照した。その他、Ihab Hassan, *The Dismemberment of Orpheus: Toward a Postmodern Literature*, 2nd. ed. (Madison: U of Wisconsin P, 1982), Linda Hutcheon, *A Poetics of Postmodernism*:

History, Theory, Fiction (London: Routledge, 1988) も参考にした。

- 2) Robert F. Kiernan, *Saul Bellow* (New York: Continuum, 1989) 40.
- 3) 例えば、Tony Tanner, *Saul Bellow* (1965; New York: Chip's, 1978) 38-57を見よ。
- 4) Saul Bellow, *The Adventures of Augie March* (New York: Viking, 1953). 以下本稿での引用はこの版により、括弧内にページ数を示す。
- 5) Eusebio L. Rodrigues, *Quest for the Human: An Exploration of Saul Bellow's Fiction* (Lewisburg: Bucknell UP, 1981) は、次のように指摘する。“Machiavellians and theoreticians want to impose their views on him [Augie]” 63.
- 6) M. Gilbert Porter, *Whence the Power? The Artistry and Humanity of Saul Bellow* (Columbia: U of Missouri P, 1974) 66. は、*Augie March* には、“a number of structural divisions” が存在すると指摘している。この指摘はピカレスク小説的側面を暗示していると思われるが、主人公のいきあたりばったり式の生き方以外に物語を束ねる要素がないと主張するにはあまりに“fate good enough” や “axial lines” への言及が多く、このため *Augie March* はピカレスクと教養小説的要素の混在を招く結果に至っている。この点に関しては、Daniel Fuches, *Saul Bellow: Vision and Revision* (Durham: Duke UP, 1984) 57-77. の議論が参考になる。
- 7) Robert Penn Warren, “The Man with No Commitments.” *Saul Bellow*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986) 9-12. 所収。
- 8) Robert R. Dutton, *Saul Bellow*, Rev. ed. (Boston: Twayne, 1982) 48.
- 9) この点に関しては、Tanner, Porter, あるいは、Keith M. Opdahl, *The Novels of Saul Bellow: An Introduction* (University Park: Pennsylvania State UP, 1967) を参照。
- 10) 詳細は、Malcolm Bradbury, *Saul Bellow* (London: Methuen, 1982) を見よ。
- 11) Paul Maltby, *Dissident Postmodernists: Barthelme, Coover, Pynchon* (Philadelphia: Pennsylvania UP, 1991) 131.
- 12) 例えば、典型的な研究として、Ellen Pifer, *Saul Bellow: Against the Grain* (Philadelphia: Pennsylvania UP, 1990), Michael K. Glenday, *Saul Bellow and the Decline of Humanism* (London: Macmillan, 1990) が挙げられる。